

柞乃杜

秩父神社社報

柞乃杜（ははそのもり）

第 12 号

平成7年7月23日



柞乃杜 2015
Mito

戦後五十年の夏

「國破れて 山河あり 城春にして 草木深し」

中国古代の詩人は 亡國の憂いを このように詠いました。

日本近代の詩人は 敗戦の衝撃を 次のように詠っています。

「^{りんげん}綸言一たび出でて 一億号泣す」と。

「鋼鉄の武器を失へる時 精神の武器おのづから強からんとす。

眞と美と到らざるなき 我等が未来の文化こそ

必ずこの号泣を母胎として その形相を孕まん」と。

あれから数えて五十年の夏

果たして「我等が未来の文化」が

「この号泣」を母胎に 「精神の武器」を育んだでしうか。

高村光太郎「一億の号泣」より抜粋

お川瀬三首

城峯神社宮司 新井 啓

幼孫いつしか伸びて

お川瀬の笠鉾曳きに

うつつなかりき

三色とお揃と持つ

提灯と笠鉾に乗る

孫の晴れ姿

三色と揃ひの着付に

汗垂らす母なれど

その面わ明るく

解説 秩父神社 (12)

埼玉県文化財審議委員

坂本才一郎

◆秩父神社社殿

災害復旧工事覚書 (1)

昭和四十一年九月二十五日、夜半の台風二十六号の来襲により、社殿は倒木により倒壊寸前の被害を受け、境内は東側から北側にかけて悉く樹木を根こそぎにし、八つ手のように樹根が乱立する異様な境内に豹変した。

十月に秩父市の文化財係と私は、宮司様のお供で県の担当課へ行き、宮司様は災害復旧について神社側としての方針を説明し、県の協力を要請した。

県としては協力するが、左記の要綱により工事を実施してくれとのことであった。

- ①工事の実施期間は四十二年度より三箇年継続事業とすること
- ②工事は修理委員会を組織して、委員会の直営工事として実施すること
- ③工事名は秩父神社社殿災害復旧工事とすること
- ④後世の改造部分は当初の形式に復し、拝殿の納額は他の建物にかけること
- ⑤その他、修理委員会の会則、修理規則、関係諸法規については、地元教育委員会の担当者と打合わせをすること



どうやっても製材できない杉の巨木の話を上上げる。神社の拝殿、西側の玉垣の内側に、俗に一本杉と呼ばれた樹齢三百二十年、径二尺八寸もある巨木があり、台風で北側に傾き、いずれ根こそぎになるであろうといわれていたが、神社では専門家の診断を受け意見を聞き、施策を協議したが名案がなく、やむなく伐採することになった。枝を払い、幹は上部から吊るし切りとして伐採し、特に根元の丸太はよく調査して、神社倒木材調査台帳に番号・樹種・樹齢・末口径・長さ・等級等を記載し、丸太の木口に番号を付して製材所へ搬入した。

すると、拝殿西側にあった一本杉であった。製材できないなら割ってみようということになり、大きな楔を打ち込んで四つ割としたが、どの面からも和釘が十本位数えられ、何れも木の成長により埋没していたが、年輪と釘の頭を合わせると、打った年代も明治までと推定された。

製材機の鋸は釘を挽くと直ぐに挽けなくなるので、これだけ多くの釘があつては不可能であつた。神木に釘を打つことを「折釘」といい、明治年間、神社の庭でこの行装を見た工匠がいる。

秩父神社の水屋は、豊富な彫刻を付した水屋として著名であるが、棟梁は十九歳の坂本森太郎で工匠は三人であつた。彫工は熊谷庄の小林榮次郎で一族五人で従事した。彫工は神楽殿に延を敷き作業場としていたが、宿は近くの空家を借用する予定であつた。しかし大工が、仕事に間に合わないかと、神楽殿の床下に寝泊まりしていたので、彫工も神社の承諾を得て大工達と合流した。

ある晩、若い棟梁は榮さんに起こされた。板の穴から光が差し込んでいる。榮さんは声を出すと合図して、穴から外を見ろというので、立ち上がって外を覗くと異様な光景に震えが止まらなかつた。白頭巾に白衣で頭に蠟燭を立て、合掌して近づいて来るものがあるではないか。榮さんは袖を引き、見るなど合図したので、棟梁は夜具の上に蹲り、暫くは興奮がさめなかつた。



翌朝榮さんは、「昨夜は本式の丑の刻参りを拝んだが十年ぶりだった」といった。見てはいけなかったのだ。満願の日に、木に釘を打ち込むのに音をたてないで打つ秘伝があるのだと教えてくれた。

以上のことは、明治二十六年水屋の棟梁として活躍した坂本森太郎(昭和三十年没)が、昭和二十七年山田の祭りの日に水屋の彫工の子孫の方が来訪されたので大変喜び、昔時を回顧して家族でも知ら

ない話がボンボン飛び出すので記録しておいたものである。

秩父神社には現代人では理解できないような鮮烈な信仰が、長い間受継がれてきたことを示す重要な資料である。

◆ 次に水屋のことを申し上げるが、秩父神社の水屋は形がよいとか、各部の彫刻がよく調和しているとか、建物を称賛した話がよく承るが、あの建物によく融和した水盤の話は聞いたことがない。

水盤は明治二十七年、児玉町金屋の鋳物師、倉林太郎兵衛が心血を注いで鋳造した名作で、形もよいが鋳肌も奇麗で、太郎兵衛の高度の技術がみられ、唐金独特の渋い肌色はなんともいえない味がある。周囲の水屋の寄進者、工事関係者百五十五名の姓名が陰刻され、水盤は棟札の役をえている。神社の水盤は花崗岩の変化のないものばかりであるが、この水屋に郷土の名工、倉林太郎兵衛の鋳造した水盤を据えた。先賢の英知には只頭が下がるのみである。

神々の森の文明

―杜のささやきに想う―

聖なる森

宮司 蘭田 稔

英国のウェールズ出身で今は長野県の黒姫高原に在住する作家、C・W・ニコル氏は、「聖なる森」という寄稿文（平成三年七月二十二日付「神社新報」）のなかで、アフリカ・ザイールの熱帯雨林イトウリに棲むピグミー族（ムブティ人）が案内してくれた彼らの聖地でのエピソードを紹介し、次のように語っている。

そこは高い木々にかこまれた岩穴で、辺りには鳥や猿の声、美しい滝の流れる水音だけが響く、それは素敵な場所だった。褐色の肌を持つ小柄な狩人は腰蓑一つという出で立ちで、手には弓と毒矢を持っている。その彼が花を一輪手折って髪に挿した。誰かが問う、どうして神がここに居ると分かるのですか。あなたには神の姿が見えるのですか。私は馬鹿な質問だと思ったが、その狩人は笑顔で答えた。神の姿は見えない、だが見えなくても此処に居ることは分かる。

ニコル氏は、この狩人の答えに心底共感して、「どこの国であろうと宗教が何だろうと、聖なる地・聖なる森において、目に見えない存在を疑うほど私は未熟ではない。」と書き、最後に「日本人であれば、悩みがあったらどんな信仰を持っている人でも、お宮を訪ねなさい。」と結んでいる。

負のイメージ

だが残念なことに、ニコル氏のようなヨーロッパ人にとって、森はけっして聖地ではなかった。キリスト教化される以前の古代欧州世界では、深い森林地帯で狩猟するゲルマンやケルトの諸民族が森に棲む神々を畏敬する（森の宗教）を営んでいたが、ローマ帝国



の征服が及んで、やがて彼らもキリスト教徒に改宗すると、森は一転して邪悪な魔ものや狼のような恐ろしい野獣が棲む異界と化した。中世では、教会が支配する都市や農村が神聖な神の世界を構成し、周辺の自然や森林は、いずれ神の栄光の下に征服さるべき野蛮な闇の世界とみなされたのである。

そのことについては、たとえば、スタンフォード大学のロバート・ハリスン教授がその著『森—文明の影』（シカゴ大学出版会 一九九一年）のなかで、古代ギリシャ・ローマの時代から近代にいたるまでの西欧文明で、森林がいかにカオス的な負のイメージを帯びてきたかを、文学、思想、芸術にわたって論じている。また、永く日本文化を研究しているフランスの文化地理学者オギュスタン・ベルク氏も、その著書『風土の日本—自然と文化の通感』（ちくま学芸文庫 一九九一年）で、日本の伝統文化における森林や自然への親和性を「フィジコフイリー（自然愛好）」が支配する傾向として、これがキリスト教の伝統とは全く相反するものとし、「キリスト教の伝統はむしろフィジコフォビー（自然嫌悪）の支配的な傾向を見せ、創造された自然、人間においても（原罪により）、環境においても（征服し、福音を伝えるべき異教の自然というテーマとともに）、悪として存在する自然という概念形成がなされてきた。」とさえ指摘している。

こうしたキリスト教の世界観をもつ西欧人にとっては、天然の景勝や森林を、そのまま聖地とみなすことは不可能であったし、むしろ、そこを伐り開いて教会を建て、人工をほどこした庭園にして、神の栄光を示す秩序の世界に仕立てることが主眼となった。

鎮守の森

ところが、日本では古来、幽すいな深山溪谷や、森や滝や岩などの自然豊かな景物ばかりか、植栽した人工の森林さえも、神々や霊性の鎮まる聖地であった。

とりわけ全国各地に古くから鎮座する（神社）こそは、本来は人里遠く、奥深い水源の森林や溪谷などの、天然の風物の内にひそむ隠れた霊性、すなわちカミ（神霊）が、里近くに鎮まるべく迎えられた（里宮）であるから、神社そのものが（鎮守の森）といわれるように、あくまで森に籠もる神域を理想とするのだ。

たとえば、昭和三十年代に日本を訪れたスペインの文明史家ディエス・デル・コラルは、その後に書いた『アジアの旅―風景と文化』（小島威彦訳、未来社「九〇年」という本のなかで、特に「鎮守の森」と題して次のように記している。

この国の広汎にわたって至るところで繰返された最も印象的な映像は、他でもない森と社（やしろ）とが密接に結合されているということである。…あたかも日本の〈神〉が全然を満たしている聖なる流れの凝結した一滴にほかならぬように、日本の神社は、森という神聖にして広大なる住居の最も圧縮された建築的表示ともいふべきものである。ここに云う「鎮守の森」、すなわち〈モリとヤシロとの聖なる結合〉がほかならぬ神社の本質であり、伝統的日本人の懐かしいフルサト意識に触れる神道の聖地であることは認められよう。

神々の森の文明

いま地球環境を左右する熱帯雨林の破壊など、いわゆる南北問題や人工爆発とからんで激減しつつある世界の森林を思うにつけ、いまだに国土の六十パーセントを森林が占めているという日本の現実には注目にあたいる。だが、この森林も、ただ温暖多雨のモンスーンという気候や、山岳列島という地勢などの自然条件に恵まれたからの幸運なのではない。むしろ今日にかけて数千年のあいだ、森を大切に育成し利用してきた古来の文明のあり方こそが、この貴重な成果をいまに残しているのだ。

たとえば『日本書紀』が伝える神話には、文化英雄神の素戔鳴尊（すさのをのみこと）が自分の髭を抜いてスギと成し胸毛をヒノキ、尻毛をマキノキ、眉毛をクスノキと成し、御子神の五十猛命（いたけるのみこと）や大屋津姫命（おほやつひめ）、栲津姫命（つまつひめ）に命じてその木種を国中に播か



せ、この国を青山なす緑の列島にしたと伝える。そしてこの御子神たちは、その功績によりその名も「木のくに」に由来する紀伊国（和歌山）の古社、伊太祁曽神社（いたきそ）にまつられたという。

古代から日本人は、営々と水田を開発しながら、その灌漑のために里山から奥山にかけて水源林を育成してきたが、しかもその豊かな山林を神々の業とあがめ、神霊の宿る聖樹として大切に利用してきた。だから現に全国いたるところの山間地帯の住民たちは、過疎化と農林業の衰退に悩みつつ、今なお森林に〈山の神〉をまつり、水源に〈水の神〉をまつり続けている。この小さな神々の無数にしてささやかな祭りこそ、現代の都会人が忘れてならない貴重な精神の遺産なのだ。

森のささやき

私も、昨年の秋に伊勢神宮の森近くで「千年の森に集う会」という三日間の会議を開いた。この会議は、伊勢の神宮林や全国の鎮守の森に見るような永続林や多機能林を、環境面や経済・社会面、文化面などあらゆる角度から再評価しながら、しかも今後百年、千年におよぶ将来の地球文明に向けて、国の内外に新しい「森の文明」の再構築を呼び掛けようとしたものである。農林漁業はもとより、森林、水、土、海の環境に関する専門家に経済人、文化人、宗教人などが参加しての多彩な討論の場を設け、さらには心ある市民や次代をなう若者たちの積極的な参加を得て、まことに有意義な会議だったと自負している。

かつては浅薄な都市開発の犠牲となり、昭和四十一年の台風禍で御社殿もろとも壊滅に瀕した当社の「ははそのもり」も、ほぼ三十年の歳月の癒しを経て、今ようやく〈鎮守の森〉本来の姿を取り戻しつつある。神苑の内を散策すれば、痛め付けられた老樹のかたわらにケヤキやミズナラの若木たちが、初夏の日ざしを浴びて小鳥たちと生命の讃歌をかなでている。地元のかたがたにも、時には一人しずかに「杜のささやき」を聞いてほしいと願う、今日このごろである。

（平成七年六月二十五日）

御田植神事

秩父神社神饌田について

山間にしては珍しく、田植神事を伝える神社が秩父地方にある。当秩父神社と尾田蔭地区上蔭田鎮座、椋神社の二社で、両社とも境内を御田代に見立て、田植行事の一切を模範的に行うのである。一種の予祝神事であるが、関東平野、殊に埼玉県内の低地稲作地帯に見ることが無く、山間という当地方に伝承されていることは、農耕儀礼や地域文化においても注目に値するのではないだろうか。

神饌田永代奉仕之由来

先考富田 敏風に敬神の念篤く偶々大東亞戦争最中に埼玉縣神饌田指定の依頼を受く謹んで己が所有の美田を提供し赤誠奉仕せよと懇意なし而して終戦後この榮譽を永く子孫に伝ふべく朝夕敬仰せる秩父神社に引続き奉仕せん事を發願今日に至る嗣子孝も亡父の遺志を繼承し茲に恭々しく大前に奉願をなして報恩反始の誠を捧げんとする者也

昭和三十九年十二月

願主 横瀬村 富田 孝
神饌田 秩父市 新井國太郎



加えて当社は、左記のような神饌田を有している。

所在地 秩父郡横瀬町大字横瀬
管理者 富田 孝氏 (現町長)

面積は約百二十坪であり、古くから抜き穂や米が納められたと云われるが、その沿革は当社額殿に奉納された篇額によって窺うことができる。

昭和三十九年正式に当社に奉納されたことが伺え、奉納状も社蔵されている。以後毎年田植祭を執行し、一切の管理全てを富田家が執行している。收穫後は当社例大祭(十二月三日)に先立って、十二月二日新穀奉獻祭において当主、富田 孝氏によって大前に奉奠される。

神饌田の田植祭は、例年六月中旬に行われ、当社の恒例行事の一つとされ、斎主は宮司が奉仕する慣わしとなつて

◆ 新人紹介

実習生 塩谷 昌子

私は、秩父神社お田植祭に縁が深い、中町に鎮座する今宮神社の家に生まれましたが、幼いころから父の仕事の都合により東京で育ちました。

高校三年生のとき「私は女の子だから、人に対して優しく接することのできる職業につきたい」と思い、國學院大学で神職の資格をとりました。卒業後は東京の井草八幡宮で二年間ご奉仕し、この四月より秩父神社に奉職させて戴くことになりました。

「神職」というイメージは、とかく堅くなりがちですが、「女性神職」ということで女性ならではの「柔らかさ」や「温かさ」、そして「優しさ」を大切にしました皆様にもそれらを感じていただければ幸いに存じます。

緑深い柞の杜の中で、どなたからも親しまれますよう努力を重ね、神明奉仕に動しんで参りたいと思います。未熟者でございますが、あたたかくお導き下さいますようお願い申し上げます。



昭和45年4月27日生
東京都練馬区出身
國學院大学文学部
神道学科卒業
井草八幡宮奉職
趣味 舞踊・華道

巫女見習 田嶋美代子

この四月より巫女見習として奉職させて戴くことになりました。

私は秩父に生まれ育ち、いろいろな行事で当社をお参り致しましたが、今振り返ってみると歴史のことについては殆ど知らなかったことがわかりました。これから少しずつ勉強していきたい、皆様のお役に立てるように頑張っていきたいと思

ます。



昭和51年7月24日生
秩父市上町出身
秩父東高校卒業後奉職
趣味 音楽鑑賞

巫女見習 森前 淳子

今年の四月より巫女見習として奉職させて戴くことになりました。

お宮にも徐々に慣れ、沢山の緑に囲まれた良い環境のなか、先輩方のご指導のもと、大神様にお仕え申し上げております。

各地域から参拝、祈願、色々な思いで神社へ訪れた人々に好感をもっていたける巫女として、また秩父に生まれ育ちながら神社の歴史や秩父の地域の事などについて殆ど知らなかったもので、日々勉強を重ね頑張っていきたいと思



昭和51年7月10日生
秩父市中町出身
皆野高校卒業後奉職
趣味 音楽鑑賞

ふくろう

梟だより



◆靖國神社御祭神報恩感謝祭のこと

去る五月二十三日、東京九段に鎮座致します靖國神社御本殿大前において、神社本庁主催による「靖國神社御祭神報恩感謝祭」が斎行されました。

正副総長以下役員、全国神社庁長、評議委員、総代会役員、また神宮大宮司ら関係者約四百名が参拝し、当社からは、宮司ほか随員一名が参列致しました。

こんにち、私たちが平和な生活を営むことができますのも、五十年前に国体の安泰、国家の繁栄を願いとし散華されてゆかれた護国の英霊たちのご加護によるものと深い感謝と尊崇の念を抱くものであります。

◆新井一夫大総代

剣道範士昇格お祝いのこと



当社大総代をお務め戴く新井一夫様におかれましては、この度剣道範士に昇格され、そのお祝いが去る六月十八日に秩父市民会館に於いて行なわれました。

秩父では、故高野佐三郎先生以来の範士就任ということで、大変名誉あることと心からお祝い申し上げます。新井様は織物業を営む傍ら、秩父市

助役として長く活躍され、当社大総代としては昭和三十六年よりそのご尽力を賜っております。

また、この度の平成御大典奉祝記念事業におきましては、建設委員長のご重責をお受け戴き、愈々着工されました新崇敬会館の建設に付きまして、ご指導を戴いております。

◆当社宮司

神社庁副庁長就任のこと

平成七年四月一日付をもって、当社宮司 薮田 稔は、埼玉県神社庁副庁長に就任致しました。

また同日、埼玉県神社庁庁報室長を拝命し、庁報をはじめ各種広報活動の長として尽力することとなりました。

◆大祓式のこと

古より神道では、浄く、明るく、正しく、直ぐを尊び罪穢れを忌嫌うものとされております。

私たちの日常生活のなかで、知らず計らずのうちに、触れ犯す罪穢れを、年毎の六月と十二月の晦日に神々のお力によって祓清め、そして健康で明るい生活を営むことを祈る神事を「大祓式」といいます。

当社におきましても、毎年夏越の大祓（六月三十日午後三時）、年越の大祓（十二月三十一日午後二時）を斎行致しております。当日、氏子の皆様を始め、県内外から多くの崇敬者の方が訪れ、盛況のうちを終了致しました。

◆秩父妙見講

(自平成七年六月)

二月十一日温旧会秩父神社講

関根巧元講元外十九名

二月二十四日宮ノ側講

長谷川正雄講元外九十一名

四月十九日皆野妙見講

関口ミツ代講元外二百九十五名

四月二十五日幸手妙見講

大久保利一講元外五十二名

五月一日上時田講

年代 寛講元外四十四名

五月十四日近戸講

市川信雄講元外六百九十九名

五月二十日原谷講

岩川福一講元外四百八十八名

六月三日中宮地講

山口 清講元外二百四十名

六月五日川越終講

横山 功講元外三十名

六月十一日熊木講

加藤正二講元外二百八十五名

六月十六日野田講

荒船啓介講元外二百八十名

六月二十六日白岡妙見講

斎藤悦男講元外二十五名

六月二十八日日本町講

大島孝子講元外百十三名

◆新講元就任のお知らせ

上時田講 年代 寛様

近戸講 市川 信雄様

日野田講 荒船 啓介様

右の方々は、今年度より新に秩父神社講々元に就任された皆様です。今後とも宜しく願ひ致します。

◆氏子青年会活動について

発足以来五年が経過し、現在では会員五六〇有余名を数える会になりました。全国氏子青年協議会にも登録され、いよいよ事業活動も充実するものと思われれます。

新年度事業として、初の参加ではあります。去る七月八日新潟県で開催された「第三十三回全国大会」に会長以下役員十名が参加致しました。埼玉県からは他に大宮氷川神社氏子青年会のメンバーが合流し、多数の全国単位の会員と交流が深められたことは有意義なことと思われれます。

尚、今年も観月コンサートをはじめ勉強会、視察見学他、会員相互の親睦を図る企画等も考えておりますので多数ご参加下さい。

◆職員辞令

宮司 薮田 稔 埼玉県神社庁

副庁長を命ず

庁報編集室長を命ず

(四月一日付埼玉県神社庁)

巫女 小池 寛子 願により職を免ず

巫女 武井真理子 願により職を免ず

(三月三十一日付)

巫女見習 新井 咲野 巫女を命ず

塩谷 昌子 実習生を命ず

田嶋美代子 巫女見習を命ず

森前 淳子 巫女見習を命ず

(四月一日付)

御大典奉祝事業報告



秩父神社 崇敬会館・新斎館 完成予想図

当社御大典奉祝事業の第二期工事として予定されます「新崇敬会館」建設工事の着工に伴い、この六月末までに旧社務所及び旧参集所が解体撤去となりました。

長く慣れ親しまれて参りました旧社屋の跡地を一望致しますときに、七十年ぶりにその姿を現しましたご神域、またご神木の数々が、あらためて柞乃杜の往時の姿を偲ばせて、感慨無量の心境でございます。

多くの氏子崇敬者の皆様にご理解を戴き、浄財のご寄進を賜りましたことに付、厚く御礼申し上げます。

当初の事業計画に基づき、完成予想図に描かれます「新崇敬会館」の概要につきましては、広いロビースペースを中心に、社務所・会議室・集会所等の機能を兼ね備え、また秩父宮家のご事跡を後世までお伝え申し上げるべく、宮家御下賜の品々を広く市民に公開し、当地との御縁を紹介するコーナーを設ける予定です。

来る平成八年の秋に予定されます竣工式までの間、各種工事の実施に伴い夏祭り、冬祭りまた節分祭等に際しましては、ご迷惑をおかけすることが多々あるかと思いますが、何卒郷土秩父の将来のためにもご理解ご協力の程、宜しくお願い致します。

募集のお知らせ

平成八年完成予定の新崇敬会館二階に展示されます当社縁の古い写真(社殿、境内等が撮影されている写真)を募集致します。詳しくは、社務所までご連絡ください。



表紙説明



今回の表紙絵は、秩父市熊木町に住まいの斎藤政一先生にこの社報のため、特別に描いて戴いた作品であります。

秩父神社境内地にあった斎館を取り壊してみると、そこには今まで見ることができなかった風景が広がり現れ、樺の幹の力強い太さと深緑の青々とした葉がとも印象的であります。しかし、新しい会館が建設されるとその風景はまた閉ざされた空間に戻ってしまい、先生曰く「つかの間の風景」というイメージで描かれたこの作品は、まさに貴重な歴史的一瞬の風景であると言えます。

先生は秩父市久那に生まれ、十八才の頃に結核を患い、小川の日赤病院に入院した際、多くの絵を描き、その描かれた中の数点を故清水武甲氏の父、柏翁氏に評価されたことが切掛けとなり、本格的に絵を勉強するようになったといえます。

- 一九四八年 一水会展初入選 (23才)
 - 一九五〇年 東京芸術大学研究生 (25才)
 - 一九六〇年 一水会会員 (35才)
 - 一九六八年 安井賞展出品 (43才)
 - 一九七二年 日展特選受賞 (46才)
- 数々の出展や賞に輝き、また六十才の時はドイツのデュッセルドルフに滞在し、ドイツ・オーストリア各地を描かれ、常に意欲的な活動を続けられ、現在は一水会会員また秩父美術家協会顧問を勤めていらっしゃいます。

編集後記

■眩しい陽のもと、境内にも涼傘の華が見られる季節となりました。ここに川瀬祭りを迎え、社報「柞乃杜」第十二号をお届けします。

■本号「秩父神社解説」におきまして埼玉県文化財保護審議会委員、秩父市文化財保護審議会を務められる秩父市山田在住の坂本才一郎先生に寄稿して戴きました。先生は、昭和四十一年九月の台風来襲により一部壊滅的な被害を受けた社殿を復旧するため、工事監督という重責に着かれ、ご尽力戴きました。又、昨年十月には「秩父祭はこれからどうあるべきか」というテーマで講演され意欲的に秩父の文化発展に努めていらっしゃいます。

■過去現在そして未来へという、ひとつの流れのなかで文化は生まれ、形作られ、育ってゆきます。坂本先生同様古き昔より秩父の総社として斎き祀る当社も、過去現在そして未来へと文化の発信源となり、この度の新崇敬会館の早期完成を望み、秩父文化発展に貢献できればと考えております。

平成七年(元号)七月二十三日
編集 秩父神社社務所
発行 秩父神社社務所

〒266 埼玉県秩父市番場町一一一
TEL (0486) 221-0262
FAX (0486) 241-5596
印刷所 有限会社 拓文社印刷所
〒266 秩父市東町二七一八